

研究発表申込フォーム

氏名：牧志朋子

氏名のローマ字表記：MAKISHI Tomoko

所属：東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻文化人類学コース博士課程 1 年

専門分野：文化人類学

発表のタイトル（日本語）：住宅に住んでいても「家がない」——モンゴル都市部における「自分の家」の倫理的重要性に関する試論

発表のタイトル（英語訳）：Living in a house but having “no home”—The ethical significance of “one's own home” in urban Mongolia

発表要旨（日本語で 600 字～800 字程度）：

本発表の目的は、経済不況期（2010 年代後半）のモンゴル国ウランバートルにおいて、ゲル地区アパート化事業・老朽化アパート建替事業停止の被害に遭った住民を事例に、都市の状況において住居がいかなるものとして立ち現れているかを考察することである。

民主化以降のウランバートルの住居に関する研究は、主にゲル地区を対象として、住居に対する人間の関わり方を所有や居住空間の構造の観点から考察してきた。先行研究の注目は、法的・非法的な方法による土地獲得の実践を通じた所有の性質の特徴解明にあった。しかし、先行研究の議論は、住環境に密接に関連する現地の物理的環境について、言及すれども理論的考察にまで掘り下げていない。本発表では、事業停止によって「家がない」状態に陥った住民や関係者の発言を出発点として、住居研究とウランバートルの物理的環境に着目した先行研究における倫理に関する議論とを結びつけ、同市の環境において「自分の家」に住まうことが持つ倫理的重要性の照射を試みる。

2010 年代前半のウランバートルでは、第 5 次改訂都市計画マスタープランをもとに、ゲル地区アパート化事業をはじめとする住宅地再開発事業が計画・実施された。しかし、2014 年頃には経済不況の影響を受け建設工事がしばしば停止され、再開発対象地域の住民たちは、以前の住宅を失ったうえに新しいアパートにも入居できないという状況に置かれた。彼らの声は、人道支援団体による報告、国内外のメディア、裁判判決文書などに記録された。これらの記録に共通して現れる「家がない гэр оронгүй」という一見当たり前のように見える住民たちの発言を手がかりに、「自分の家」に住まうことの重要性、とくにその倫理的実践としての性格を明らかにする。分析に使用する材料は、当時の再開発計画中断に係る裁判資料、ウェブニュース、およびドキュメンタリー映像とする。